


The background features two large, overlapping abstract shapes. The top-left shape is a teal color, and the bottom-left shape is a pink color. They overlap in the center-left area, creating a layered effect.

私たちの龍ヶ崎 未来予想図

Team：龍ヶ崎から離れて暮らすけど、関わり続けたいA

- 
- ▶ 自己紹介
 - ▶ 私たちから見た龍ヶ崎
 - ▶ 龍ヶ崎の未来予想図
 - ▶ 私たちのストーリー
 - ▶ 未来の龍ヶ崎へメッセージ

01_自己紹介

■出身・在住：龍ヶ崎市

■龍ヶ崎の好きなところ

お店が充実している、落ち着いている

■龍ヶ崎の課題

バスと電車の連携、駅前の店を増やす

■将来の家族像

家族旅行にたくさん行くような仲良し5人家族

■出身・在住：龍ヶ崎市

■龍ヶ崎の好きなところ：住みやすい

■龍ヶ崎の課題：若者の流出

■将来の家族像

こどもは居ないが夫婦でまったり暮らす

■出身・在住：龍ヶ崎市

■龍ヶ崎の好きなところ：自然豊かで住みやすい

■龍ヶ崎の課題：魅力的な施設や学校が少ない

■将来の家族像：結婚してできれば子供が欲しい

■出身・在住：龍ヶ崎市

■龍ヶ崎の好きなところ

都内に1時間弱でいける、美味しいものが多い

■龍ヶ崎の課題：バスの本数、駅前の活性化

■将来の家族像：夫婦とペット

犬の散歩をして、色々な美味しいものを食べたい

■出身・在住：龍ヶ崎市

■龍ヶ崎の好きなところ

公園が多くこどもが過ごしやすい

■龍ヶ崎の課題

バスや電車など公共交通機関の発展

■将来の家族像：結婚してこどもが二人

02 私たちから見た龍ヶ崎

良いところ

- ・ 食品が新鮮
- ・ 家、家賃、土地が安い
- ・ 近所の人たちの交流が多い
- ・ 教育熱心
- ・ 都内に行かなくても衣食住がだいたい揃う

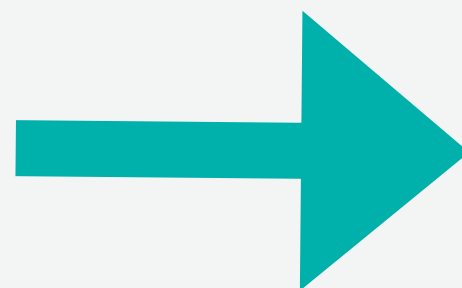
改善点

- ・ 学生でも働ける場所を増やしてほしい
- ・ 時給をあげてほしい
- ・ バスの本数を増やしてほしい
- ・ 電車の路線を増やしてほしい
- ・ 電車とバスの時間を合わせてほしい
- ・ 駅前にお店を増やしてほしい
- ・ 龍ヶ崎駅まで行くコミュニティバスを増やしてほしい

03 龍ヶ崎の未来予想図

未来に望むこと

- ・ 病院の充実（小児科オンライン診療・夜間病院）
- ・ 小学生も遊べる遊具を設置した公園が増えてほしい
- ・ 幼稚園、保育園を増やしてほしい
- ・ 学童保育をもっと充実させる
- ・ 自分に合った高校を選ぶよう高校を増やす
- ・ スクールバスを増やしてほしい
- ・ 大学のキャンパスを誘致する
- ・ 市主催の同窓会の開催
- ・ ガクチカイベントの開催をする
- ・ 企業の就活イベントを開催してほしい
- ・ リラクゼーション施設がほしい
- ・ 花火大会などのお祭りを増やしてほしい
- ・ 帰ってきた時に楽しく遊べる場所がほしい
- ・ 恋愛講座など開いてほしい



そのためにできること

- ・ 学生を受け入れる場所を増やし、若い世代が過ごしやすい住み続けたい龍ヶ崎にしてほしい
- ・ 学生を受け入れる場所＝自分の偏差値にあった高校を増やしたり、大学のキャンパスの誘致。就職がしやすいように、いろんな企業の就活イベントを文化会館でやる
- ・ 5年に1回、きりが良い時期に市主催の同窓会があると戻ってきやすい
- ・ 公園がいっぱいあるが遊具がないので、小学生でも遊べる公園の整備

04_未来story



プロフィール

- ・ 名前・年齢 龍崎 さき(20歳)
- ・ 将来の職業 都内のIT系の会社に従事
- ・ 将来の家族構成 結婚して子供がいる(男女1人ずつ)
- ・ 趣味 カフェ巡り、ショッピング
- ・ 将来の夢 将来は子どもたちがのびのび暮らせるところで大きな家に住みたい

Story

■5年後

都内のIT企業で働きはじめて3年が過ぎた頃、さきは社会人としての生活にようやく慣れ、休日のカフェ巡りやショッピングを楽しむ余裕も生まれていた。

そんなある夏、5年に一度の同窓会の案内が届き、久しぶりに龍ヶ崎へ帰省した。

駅に降り立った瞬間、かつて見慣れていた風景が変わっていることに気づいた。整備されたロータリー、増えたバスの本数、新しくできた店舗。

学生のころには想像できなかったほど交通の便が良くなっており、まちは明るく賑わいを取り戻していた。

同窓会の会場へ向かう道すがら、さきは懐かしさとともに、地元が少しずつ前に進んでいることへの誇らしさを感じた。

それは、若いころに抱いていた「地元をもっと良くしたい(地域に貢献できる働き方があれば…)」という思いが、確かに誰かの手で実を結びつつあるのを見たような気持ちだった。

04_未来story

■10年後(30歳)

20代後半で結婚し、29歳で第一子を授かった。都内での仕事は変わらず続けていたが、リモートワークを取り入れることで家庭との両立が少しずつ形になっていた。

忙しさの中にも穏やかな日常があり、さきは家族とともに新しい生活のリズムを築いていた。年に二、三度の帰省は、いつも心を落ち着かせてくれる時間だった。

市が主催し5年に1度行われる同窓会で、久しぶりに龍ヶ崎へ戻ると、駅前の変化にまた驚かされた。再開発が進み、商業施設やカフェが並び、家族連れの姿が増えている。同窓会の夜は実家に泊まり、翌日、子どもを連れて訪れた大きな公園には、カラフルな遊具が設置されており、公園の中で子どもが駆け回る姿を見つめながら、都内にはない広さと空気の柔らかさを感じた。都会の便利さの中で暮らす一方で、自然に囲まれたこのまちには、子どもが自由に成長できる環境がある。いつかこの場所に戻ることがあるかもしれない。同窓会を期に、友達との再会や実家の温かみを感じ、ふと今後について考えてみた。

04_未来story

■15年後(35歳)

32歳で第二子を出産し、家族が四人になった。そして35歳の春、長く思い描いてきた龍ヶ崎への移住を決断した。きっかけは、30歳のときに参加した同窓会だった。子育てのしやすさや地域の支援の充実について話を聞き、具体的に生活をイメージできるようになった。

移住後の暮らしは穏やかで、心に余裕をもたらしてくれた。朝は緑の風が窓から入り、通りには近所の人たちの挨拶が行き交う。子どもたちは地域の幼稚園や保育園に通い、自然の中でのびのびと成長している。

都内の会社とはリモートでつながりながら、さき自身も地元のデジタル支援活動に携わり、かつて憧れていた「地域に貢献できる働き方」を実現していた。

忙しさの質が変わり、心の重心が都会から少しずつ地元へと移っていく。かつて外の世界で積み上げた経験が、今はこのまちの一部として息づいている。その循環の中にいる自分を、さきは静かに受け止めていた。

夜、窓の外に広がる花火の光が空を染める。遠くから聞こえる歓声に耳を傾けながら、十五年前に心に描いた「子どもがのびのび暮らせるまちで生きたい」という夢が、今ここで確かに形になったことを感じていた。

05_未来の龍ヶ崎へ私たちからメッセージ

温かくて、住みやすい
自然が豊かで便利なまち

～笑顔あふれる、安心して暮らせる魅力的な龍ヶ崎。～



ご清聴ありがとうございました。

Thank you